千葉経済大学短期大学部
研究紀要　第14号　73～80（2018）
授業研究

本学におけるピアノ指導の授業設計

― 保育士の経験を踏まえて ―

越川　香織・高木　誠

A design of a piano class lesson at Chiba Keizai College

― Reffering to my experience as nursery teacher ―

Kaori KOSHIKAWA・Makoto TAKAGI

Ⅰ　はじめに

筆者は母校である本学に、ピアノ＆音楽関連科目のTA（ティーチングアシスタント）として平成28年度から勤務している。保育士として保育所やこども園に勤務した経験を活かすべく、１年半に渡って職務にあたってきた。通常の授業アシストに加え、こうした実務経験を保育者養成に活かすことも期待された為､｢基礎音楽｣｢器楽Ⅰ・Ⅱ｣｢ピアノ簡易奏法｣｢こども歌唱Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ｣のTAを務めることで科目全体を見渡す立場となった。またこれらの授業に関与すると同時に、多くの時間をピアノ練習室に待機して学生と至近距離で接する貴重な機会を得た。本稿は、こうした立場から40年以上にわたって本学で実施されてきた既存科目の授業設計を報告するものである。

Ⅱ　授業設計の観点

(1) 現場のピアノに対する認識

現場では、ピアノに対する苦手意識の有無によって、日々の保育に少なからぬ影響が及ぶ。ピアノが得意な担任のクラスは音楽が溢れているのに対し、ピアノが苦手な担任のクラスはピアノの演奏を避けてしまう傾向にあるため、歌声に活気がない。通常、保育園では、０～２歳児クラスの担任はピアノに触れる機会が少なく、学年が上がるごとにその機会は増えていく。複数担任でクラスに１人でもピアノが得意な保育者がいれば、ピアノが苦手な者は救われた気持ちになるのだが、単独で担任をもつ可能性がある３～５歳児の担任になった際にはピアノ演奏を避けることは難しく、相当な負担を感じるものだ。年度毎に担当する年齢は変わるため、新年度のクラス発表に際しては何歳児を担当するかという緊張感と共に、ピアノが得意な保育者と同じクラスになれるだろうかと一抹の不安を抱く現状だ。

また通常保育のみならず、行事担当の際もピアノを演奏する機会がある。大きい行事として挙げられる発表会やお遊戯会、入園式や卒園式では相応の選曲をするため、ピアノ伴奏は簡単なものばかりではない。大きい行事に目を向けがちだが、これらに加えて毎月の誕生会や季節ごとの行事（例えば七夕やクリスマス等）など、子どもの教育のために取り上げる行事は多く、園全体の職員数にもよるが１年に複数の行事担当をせざるを得ないのが現状である。行事の担当になれば、歌う際の伴奏を担うこととなる。そのたびに負担を感じていては息の長い保育者生活を送ることに支障をきたしかねない。

筆者は幸い、ピアノが好きで長年経験を積んできたため、そのような苦労はなく、むしろ日々の保育に役立て、行事の際には演奏や合奏指導を任された。ピアノが苦手な保育者に対してはアドバイスを求められたり、楽譜を簡易に書き直したりした。楽譜を簡易にする際、編曲の参考にピアノの経験年数を聞きとり調査した。最も多かった回答は、昔ある一定の期間のみ習っていたというものだ。簡易にしてほしいと頼まれる楽譜はアップテンポな子どもの曲や、教育テレビなどメディアを通して子どもたちが知っている曲、卒園式で選ばれる定番の曲から最新の曲まで内容は多岐に渡った。苦手な者は口を揃えて「昔からピアノを習っておけばよかった」「時間がある学生時代にもっとやっておけば良かった」と言う。

ピアノができないことにコンプレックスを抱いているのだ。

最近の例を挙げてみる。今年の夏に行われた教員免許更新講習の際に、卒園式の定番ソングになりつつある「たいせつなともだち[i]」という曲を披露する機会があった。この曲はベネッセから出ている曲で、インターネットで検索すると無料でダウンロードできる。筆者が勤めていた園でも卒園式で歌っていたことから、「基礎音楽」の授業でもとりあげた。更新講習に参加した半数は保育所や幼稚園の教員で、参考演奏を披露した後、「この曲は前奏と間奏が難しく、練習したけれど演奏できなかった」「前奏が弾けなかったので前奏はカットして演奏せざるを得なかった」という声を聞いた。偶然時期を同じくして、筆者が以前勤めていた保育所の同僚から「たいせつなともだち」に関して「難しいが卒園式で演奏しなければならないため、楽譜を簡易伴奏にしてもらえないか」という依頼を受けた。楽譜を簡易にしてほしいとの依頼は新人もベテランも関係ない。現場で長年経験を積んでも、ピアノに対する苦手意識があることで、演奏が必要な局面に直面する度に心理的負担になっていると感じた。日々の保育で忙しいなか、時間を割いて練習に取り組んでも一向に弾ける見込みが立たないということは、新人でもベテランでも辛さは一緒である。現場において、保育者間で一目置かれる存在に、ピアノを得意な者が多いように感じていたのだが、それもピアノに対するコンプレックスからきているのかもしれない。

(2) 学生のピアノに対する認識

新入生のピアノ先行体験はいかなるものか。幼少の頃から継続的に習っていた者、ある一定期間のみ習っていた者、本学に進学が決まった時点で習い始めた者、特に習ってはいないが自宅にピアノがあり我流で弾いていた者、本学に入学してから初めてピアノに触れた者、等々、学生の先行体験は様々である。入学後の上達速度はそうした経験に左右されるのみならず、生来の音楽的素質も影響を及ぼす。また、ピアノの経験がなくても、吹奏楽部や合唱部などの部活動で音楽の経験を積んできた者は、全く音楽に触れてこなかった者より概ね上達速度が速いようである。

未経験の学生は、ピアノに対して過剰な不安を抱いている場合がある。練習室の学生にたずねてみると、こちらから見て適正十分な学生でも、経験がないことに気後れして積極的にピアノに向かえないようだ。練習における積極性は大切で、前向きに捉えて練習に取り組んだ方が、心理的負担も軽減でき、より集中的に効果的な練習になると思われる。

また授業のアシスト中、あまり弾けていない者に練習をしているか質問してみると、自信満々に「はい」と回答が返ってきた。そこでさらに１週間の練習した日数と練習時間を具体的に質問してみると、「今日、授業が始まる少し前にやった」という回答だった。楽器を経験している者からすれば、毎日とは言わずとも、１週間で数日は練習しない限り上達は見込めないと予想がつくものだが、楽器の経験がない者は練習が必要という概念は知っていても、具体的な事柄までは理解していないことに気づかされた一件だった。

ピアノに対して苦手意識をもつ学生は、就職先を選ぶ際に幼稚園を避ける傾向があるようだ。本学では、幼稚園教諭の免許取得条件に、「器楽Ⅰ」の単位取得が含まれる。1年次の段階で、ピアノに苦手意識を強くもった者はその時点で幼稚園教諭の道をあきらめてしまう場合がある。

２年次の６月に保育実習、９月に教育実習を終えた時点で就職先を具体的に考えた際、ピアノの苦手意識が強い学生は幼稚園を避ける傾向にある。単独で担任をもつ幼稚園ではピアノ演奏を避けることは難しい。幼稚園では一人担任が多く、日々の生活の中でピアノを使う場面も多々ある。それに対し、保育所は複数担任の場合が多く、クラスにピアノが得意な保育者がいればピアノに触れる機会が少なくなる。さらに担当学年が低くなるにつれピアノ演奏をする機会は減る。特に０～１歳児クラスでは、保育室にピアノやそれに相応するキーボードなどを置いていない場合が多い。

筆者は勤めていた保育所が幼稚園と統合され、こども園になる節目の時に数年勤務した。保育所だった頃は、朝の会等にピアノ演奏をする機会が習慣としてなかった

が、幼稚園と統合したことにより、３歳以上児クラスでは毎日、朝の会や帰りの会で歌う際にピアノを演奏することになった。幼稚園から異動になった保育者たちは皆、ピアノ演奏自体に戸惑いはなく、個人のレベルの差はあるが、保育には差し支えない程度の演奏ができ、日々のピアノ演奏に負担を感じる保育者は見られなかった。これに対して、保育所から異動した保育者は、ピアノに苦手意識をもつ保育者が３歳以上児クラスの担任になった時、苦労したのを見ている。就職先に幼稚園を選ばず、保育所を選ぶ保育者の中には、他にも様々な要素はあるものの、ピアノが苦手だからという理由の者も少なからずいる。

この逆も然り、ピアノが得意な者は、よりピアノを活かせるであろう幼稚園に就職を希望する学生も多い。得意ではない者でも、実習先の幼稚園や母園の雰囲気が気に入り就職を希望する者は、残りの在学期間になんとかピアノのレベルを上げようと一念発起する者もいる。

保育所だからピアノを使わないとは限らない。園の方針によって様々だ。ピアノが苦手で心理的負担が大きく、ピアノを使用したくないという者は、ピアノに触れる機会がほとんどない「学童保育」や「企業内託児所」などを選ぶ。これは筆者が在学中とあまり変わらない印象である。

以上のことから、学生のピアノに対する認識は、現場の保育者たちの置かれた状況と大差なく、ピアノの苦手な者は心理的負担からピアノを避け、就職先の選択肢を狭める傾向が一部に見られる。

(3) 職能としてのピアノ演奏能力

ピアノ関連の職種としては、演奏家やピアノ指導者以外には、小中高の音楽専科の教諭、小学校教諭、幼稚園教諭、保育士、などが挙げられる。この順に専門的な技術が少なくてすむように思われがちだが、それはピアノ演奏技術のみに着目した専門性で、それとは別に、それぞれの職種毎の専門性あるいは特殊性が存在する。

ピアノを演奏する前提とは何か。ピアノの上手な人は、流暢に演奏に没頭しているようにみえるが、様々なステップを経た上で演奏は成り立っている。演奏するためには、楽譜を読まなければならない。楽譜に記された音符の音高や音価（＝音の長さ）を理解し、左右10本の指で楽譜の指番号通り鍵盤を弾いて音を出す。この一連の作業を読譜という。音符を目で認知し、音楽的意味を判断し、楽譜を読み進め、反復練習によって一曲を反射的に弾けるまでに達して演奏が完結する。読譜という作業には、音感とリズム感（拍の保持・空間分割・反射神経）が主な役割を果たすが、それに加え、集中力と「弾けるようになるまで練習を反復する士気の高さ」といった一般的資質も大切である。

読譜力は、職業上ピアノの演奏をする者にとっては必須である。趣味の世界では読譜をスキップし、耳コピーで曲の演奏に達することも可能だが、それは職業上の能力とは言えず、保育者の職責を全うすることはできないだろう。

読譜には音感とリズム感が必要である。リズム感は音価をきちんと理解し、決められた拍の中で正確にリズムを刻むことができるかというものだ。音価を数値として理解していることと実際に演奏できることの間には大きなハードルがあり、正しいリズム感に裏打ちされた演奏を成し得るには経験と訓練が必要である。

音感は、言語の習得と同様環境に左右される度合いが高い。現代は生活の中に音楽が溢れているため、特別な音楽経験を積まなくても一定の音感は身につくことが多くなったように思う。しかし、音楽を指導する立場にある者の音感は一定以上を求められ、相対音感[ii]ではあっても、正確であればあるほど職能の高さに結び付く。

職能としてのピアノの役割は、主に歌唱指導・伴奏だが、必要なレパートリーは多岐にわたる。先にも述べたが、日常生活の中で歌う生活の歌、季節ごとの歌、生活の切り替えの合図としての演奏、発表会やお遊戯会、入園式や卒園式などの行事の歌、等々、子どもたちの周りには音楽が溢れている。その多くは高い技術を要さない曲が多いが、間違えは許されない。幼い子どもほど吸収力は高く、間違えた音やリズムで教えてしまえば、それを正しいと信じて子どもは覚えてしまうだろう。保育者の責任は重大なのだ。

現場ではピアノ演奏以外の業務が山のようにある。常

に仕事に追われている状況でピアノの演奏をこなしていくには、使う曲を短時間で準備する必要があるだろう。そのためには、究極の読譜力である初見奏[iii]に長けた者が有利である。保育の業務を遂行するうえで必要な「歌唱伴奏」や「弾き歌い」など、職能としてのピアノ演奏能力は、独奏とは異なる特性をもっている。

Ⅲ　ピアノ＆関連科目の内容・相互関係

(1) 指導スキルのコアとなるピアノ

授業の設計に大切なことはそれぞれの職種に何が期待され、その期待に応えるためにはどのような能力が必要かを見極めたうえで、それを最適化する方法を設計することである。

保育者になるための就職試験では、ピアノに対する習熟度が採用の可否に左右される状況は今も昔も変わらない。ピアノは、保育者の資質として決定的ではないが、日々の生活の中でピアノが弾けないと保育が回らないのも事実である。本学では新年度になると毎年、キャリアセンターの職員が新卒者の職場に挨拶に回るが、多くの場合ピアノの技術が話題になる。保育者の指導能力がピアノの技量にシンボライズされてしまっているようだ。この点から、カリキュラムの目標は学生の就職と卒業後の職務を円滑に進められることを念頭に置くことが第一となる。

本学の「器楽Ⅰ」のシラバスでは、保育者に求められるピアノ演奏能力とは、日常生活の中で子どもたちに歌を指導するための「道具」としてピアノを活用する能力であることを述べている。保育者には、独奏としての高い演奏技術ではなく、対象とする幼児・児童・生徒の特性を弁え、彼らに良き音楽表現を促すという専門性が期待される。

本学のピアノ指導カリキュラムは、そうした専門性を備えた教師・保育者の養成を目指して編成し、毎年改良を加えてきた。ピアノを演奏するためには様々な要素が必要で、なおかつ、保育職の専門性も考慮して授業設計をする必要がある。それには、ピアノ＆関連科目間で連携を図る方が、より効果的な学習効果を期待できるだろう。そこで、平成28年度より「基礎音楽」の担当者が変わったことをきっかけに、科目の関連付けを試みている。

コアとなるピアノの実技を扱う「器楽Ⅰ・Ⅱ」は個人レッスンのみである。個人チェックを行う、いわば個人に対してのオーダーメード型の授業である。その他の関連授業は、集団＆個人に対するカリキュラムである。それぞれの科目の内容・相互関係は下記のとおりである。

(2)「基礎音楽」（１年次前期科目）

平成28年度より担当教員が変更され、それまでの内容を一新し、器楽授業との連携を図った。内容は音楽の基礎を扱うもので、読譜に必要な知識を講じ、楽曲の構造を理解させる科目である。読譜の知識とは、いわゆる「楽典」であり内容は多岐に渡るが、現場で扱われる歌唱曲に特徴的な、短い単純な曲にフォーカスさせることで内容を厳選している。１クラス約36名の集団講義のため、知識の伝授とその浸透度を計るペーパーテストを主に実施する。

器楽の授業は個人レッスンであるため、複数の教員で担当している。担当教員が多様であることは、科目の硬直化を避ける点においては必要なことだが、反面、科目の目指す方向や価値観については全員の一致が必要である。「基礎音楽」ではこの実技指導の知識を集団講義で一斉に伝えることが可能になった。伝達内容は以下の点である。

①両手の基本位置とピアノへの構え方

鍵盤に目印のシールを貼り、初心者が鍵盤上の音を探す手間を軽減する。肩の力を抜き、手首を鍵盤より常に上に位置させること。椅子には深く腰掛けず、背骨は直立した時のようにS字カーブを描くよう姿勢を正すこと。

②楽譜を読みながら指探りで弾くこと

目で音符を追いながら、指探りで弾くことを徹底し、ピアノを使った譜読みの原則を講じる。最初から手元を見て弾く癖がついてしまうと、曲を覚えてから弾くこととなり、それ以降の譜読みに膨大な時間を要してしまう。

③歌い出しの合図＝声かけの原則

保育者のピアノ技術は単独演奏ではなく、子ども達

との一体感を持って音楽表現を行うためのものである。歌唱曲の拍子、調、テンポ、曲のムードを理解しているかについては、この声かけによって判断できる。

これらを集団に説明するのが「基礎音楽」の役割で、学生一人一人をチェックしそれが身についているかを確認し、個別に指導していくのが「器楽Ⅰ」の役割である。

なお平成29年度より導入した、教員の手元をカメラで撮影し、60インチのモニターに映すシステムは前述の①と②の説明に多大な効果があった。具体的な練習方法も集団講義で合わせて伝え、曲が弾けるまでの過程はどのようなものか、具体的な練習方法や時間・回数、そしてピアノの上達は個人差が大きいことを実際に教員がモニターや実演で見せ、初心者が挫折感を抱かないように配慮している。

(3)「器楽Ⅰ」（１年次通年科目）

個々の資質に応じてオーダーメード型の指導をするのが本科目である。２年制短大である本学では、最初の保育実習は入学してから11カ月後（入学した翌年の２月）に予定されており、そこで季節の歌や生活の歌の指導が可能なまでに準備させねばならない。短くて単純な幼児用歌曲の習得と、ピアノの基本技能の習得を同時に行う市販の教材は見当たらず、ノーテーションソフト（楽譜作成ソフト）を用いて作成したオリジナル教本を使用している。

器楽履修者には教本の上巻を最初に配布する。上巻は童謡・文部科学省唱歌を中心に構成されており、全48曲収録されている。上巻最初の「ぶんぶんぶん」「ちょうちょう」「メリーさんのひつじ」はピアノ入門の教材として用いている。この３曲に共通する特徴は、右手ポジションを基本ポジション（中央のドレミファソ）にセットすれば最後までポジション移動をすることなく演奏でき、左手の伴奏は２つのコード（＝和音）のみで構成されている点である。手元を見ず、楽譜を目で追いながら演奏することを習慣づけるために最適な教材である。

１～31番まではハ長調（便宜上わらべうたもここに分類する）、32～43番はヘ長調、44～48番はト長調である。左手は原則、主要三和音[iv]によって構成し、例外的に副三和音[v]やドッペルドミナント[vi]を使用する。

上巻は１曲を除き、すべて歌詞付きの歌唱曲で構成し、歌い出しの合図（カウント＆かけ声＝１，２，３、ハイ）をさせ、それに合わせて教員が歌うのがレッスンの基本スタイルである。声かけの習慣化は、他者を意識した伴奏において第一に身につけるべき要件だと考える。

下巻は、上巻で保育職に必要なピアノの専門性の獲得後、一般的なピアノ奏法へステップアップするためのもので、その柱はスラー[vii]によるレガート[viii]とサスティンペダル[ix]の習得である。また下巻の後半では、要求水準が急カーブで上がる。従って、全曲習得するかは個人の判断に委ねられ、一般演奏より保育職に直結した技術を学びたい者は、担当教員の裁量で適切な曲集を選択する。単位取得は、上巻を終了することと、後述するピアノ簡易奏法にて30曲をクリアすることが条件である。

(4)「器楽Ⅱ」（２年次選択科目）

器楽Ⅰの単位を取得した２年次生の選択科目で、器楽Ⅰの継続、発展を意図するが、主に器楽Ⅰで可の評価を得た者は継続、良の者は継続＆発展、優・秀の者は基本的に発展を目指している。継続的内容とは、現場の歌唱教材に対するさらなる成熟を目指す。具体的な内容は「弾き歌い」できる曲のさらなるレパートリー獲得に重点が置かれる。発展的内容とは、職能の枠を飛び出すことで、職能そのものをブラッシュアップしていけるような資質を養うことを目的とする。具体的には古今の名曲はもちろん、連弾や２台ピアノ楽曲も取り入れている。

以上はおおまかな区分で、実際には個人の就職希望に応じた完全オーダーメード型の内容となる。「完全オーダーメード型」の授業とは、実習や就職試験で必要な曲がある場合、個別に対策することが含まれる。実習先によっては、事前打ち合わせで10曲以上楽譜を渡される場合もあり、ピアノが得意ではない学生にとって負担が大きい。個々のレベルに合わせて対策することで、実習や就職試験を円滑に乗り切れるよう指導にあたっている。

⑸「ピアノ簡易奏法」（１年次夏季集中）

保育者の職能としてのピアノ技能は、歌唱指導の際にピアノを道具として活用する点にある。従来、器楽は教科に関する科目として奏法の基礎を培い、表現指導法が教職に関する実践を学ぶ科目としての位置づけがなされていた。しかし既に述べてきたように、保育現場においてのピアノの役割は、子ども達と音楽を楽しむための道具としての比重が高い。幼児向けの歌曲の伴奏を原曲のまま演奏することは、相応のピアノ経験者でも簡単ではなく、さらに、歌唱指導の際に決定的な役割を果たす「弾き歌い」をこなせるまでの技量を身につけるには相応の訓練が必要である。この点に焦点を絞り、ピアノ初心者にも「弾き歌い」が可能なように、原曲を簡易化し、演奏を技術的に軽減することが「ピアノ簡易奏法」の目的である。

重要なことは、何のために演奏の負担を軽減するかである。歌唱指導をする際の基本は、指導者がスムーズに弾き歌いできることであろう。弾きながら歌うという、２つの動作を同時にすることは簡単ではない。伴奏が難しければ、弾きながら歌うという高度なことはより困難になる。この点の解決策として講じているのが簡易奏法で、１年次前期の「基礎音楽」で学んだコードネームの知識を活用し、大譜表に簡易楽譜を自ら作成し、弾けるようにするのがこの科目である。曲数は１年次で70曲、２年次で30曲をプラスして在学中に100曲のレパートリー獲得を目標とする。

夏季集中授業として扱い、４日間15コマの短期集中で授業を行うことにより、長期休み中に全くピアノを弾かないということが無くなる利点とともに、通常の授業時では１週間に２～３曲しか進まない学生も、４日間の集中授業で10曲～50曲扱うことを経験する。このことで練習方法を改めて見直すきっかけになり、その後の練習の効率化に一役買っている面もある。器楽授業と連動しているため、後期以降の授業にも役立つ科目設定である。

⑹「こども歌唱Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ」（１・２年次選択科目）

この授業は常時開講している選択科目である。保育者を目指すにあたって、避けては通れない「声を出すこと」にフォーカスした授業だ。平成28年度から担当者が変わった為、筆者もアシストとして授業に参加し、現場で培った「手遊び」を授業の最初に教えている。筆者自身、学生時代はあまり声が出なかったため、現場に勤め始めた当初はすぐに声を枯らし、困った経験が何度もある。手遊びをする際はアカペラで正確に音程をとる必要があり、音程が正確でも声が出なければ子どもたちには伝わらない。０歳児クラスでは、子どもたちの注目を集めたい時や、子どもが泣いている時に、保育者が童謡や子どもたち向けの曲を歌うと泣き止んだり、興味を示したりすることが度々あった。より月例の低い子どもたちに向けるという点では、手が塞がるピアノの演奏より、手軽に子どもを集中させられるツールとして「声」「歌」は重宝だ。歌が上手な保育者は子どもたちから人気があり、言語がまだ話せない月齢の子どもたちからも、身振り手振りで歌を求められる場面が多々あった。

筆者は現場で声を出しているうちに、声帯が鍛えられ、学生時代よりは声が出るようになった。音程やリズム感に自信がない保育者は歌うことにコンプレックスがあり、声を出すことを避けてしまい、手遊びの際は活気がなかった。先導する保育者の自信のなさは子どもにも伝わり、生き生きと楽しく歌うことができない印象である。本科目は発声練習からきちんと始め、子ども向けの曲から本格的な合唱曲までを扱い、声量や音程感を伸ばすことを目指している。普段意識して声を出している学生は少なく、「基礎音楽」の授業で歌を取り上げた際は、高い音域になると声が出ず、オクターブ下げてしまう学生も見られた。声を出すことに心理的な壁を感じる学生は一定数いるようだ。本科目で様々な発声練習を積むことによって、心理的な壁は少し薄れ、授業が進むにつれて人前で声を出すことに抵抗感を感じる学生が減っていると思われる。

「基礎音楽」の授業でこの「声」「歌」のことに関しては学生に問題意識を提示してあり、それをきっかけに「歌が苦手なことを克服したい」「音程が取れるようになりたい」「歌うことが好きだからもっと上手くなりたい」など本科目の履修理由は様々だが、後々現場に出た際のことを意識している学生も多い。これは音楽関連科目の

教員間で連携が取れている証拠だろう。

選択授業という点と、他の必修授業と重なってしまい、履修したいけれど履修できないという声を度々聞くのは残念なことである。

(7)「弾き歌い」（年度末集中）

この授業は平成29年度に設置したばかりのものである。本稿執筆時点において、内容の詳細は計画段階だが、大綱は「歌唱訓練」と「ピアノ簡易奏法」で作成した簡易楽譜を使った「弾き歌い」の実地訓練になることは決定済みである。

「弾き歌い」とは、保育所・幼稚園で必要になる専門技術である。保育士養成関連のピアノ指導について、国立情報学研究所の学術サイト「CiNii」で論文検索をすると「弾き歌い」についての研究や報告がたくさんヒットする。「特に最近の10年間（2006年～2015年）は“伴奏”ではなく“弾き歌い”という名称が一般化し、「弾き歌い」をテーマにする研究が急増している。」（西海、笹井、細田、2017、p60）とあるように、保育者養成校でこれだけ重要視されている「弾き歌い」は、保育者を目指す者にとっては必須の技術と言えるだろう。独奏ができても「弾き歌い」ができるとは限らない。「器楽Ⅱ」でも扱っているが、集中授業で取り上げることにより科目の連携を図り、学生の技術向上に繋がるよう工夫したい科目である。

(8) 連携することの重要性

保育コースの学生には３期に分けた計６週間の保育実習と４週間の教育実習が課される。免許・資格取得を目指す学生は、在学中の計10週間の実習に加え、免許・資格取得条件の科目も多く、さらに家庭の事情等でアルバイトせざるを得ない学生に余暇などない。保育士・幼稚園教諭を目指す学生は、実習や就職までに「もっとピアノ演奏が上手になりたい」「楽譜が読めるようになりたい」「リズムがわかるようになりたい」「歌が歌えるようになりたい」と考えていることは、アンケート調査[x]からも明らかである。

しかし先にも述べたように、ピアノを演奏する際にはいくつものことを同時に行わなければならない。音楽は様々な要素から成り立っており、それぞれの科目毎に主とする内容は違うが、目指す方向まで違ってしまえば、効果的な学習は困難だろう。平成28年度より「基礎音楽」の担当者が変わったことをきっかけに、関連科目の連携が図れるようになった。集団講義でピアノへの構え方や手の位置など、ピアノを演奏するうえで中核になる導入部分を一斉に伝えられる効果は高い。最初から練習方法について一斉に伝えることで初心者へのフォローもしつつ、個別レッスンで一から指導する手間が省け、限られたレッスン時間をより効率的に使えるようになった。ピアノ＆関連科目の担当教員間で指導のコンセンサスが取れていることで、担当教員ごとの意見の相違が最小限に抑えられ、半期ごとに担当教員が変わっても学生の混乱はあまり見られない。

それぞれの科目の反省を踏まえて毎年改良する授業設計は、時代と学生のニーズに合っており、これからもより現場に即した内容となるよう、担当教員の連携を図りながら指導にあたりたい。

Ⅳ　おわりに

以上、本学におけるピアノ＆関連科目の授業設計と、科目間の連携について述べてきた。筆者は本学在学中、ピアノが好きであるからこそ、用意された教材に一生懸命取り組んだ。５年に渡る現場経験を経て、指導する側から見た授業とは、綿密な計画の上に組み立てられていることを実感する。それと同時に、日々、現場から寄せられるニーズに最適に対応した授業内容を設計することは、学生に対して有効な授業を提供する上で欠かせないことに気づかされた。筆者は縁あって母校の教職をアシストすることになったが、ピアノを演奏するのみならず、ピアノを上達したい学生に寄り添い、指導することは得ることも多い。現在指導する学生たちが、就職して現場に立ち、在学中の学びは価値のある内容であったか語ってくれることを楽しみにしている。

なお、今後の課題として、本稿で述べた授業設計の具現たる教則本の内容と、それに込められた学習必須事項、簡易奏法で取り上げる曲の選定方針とその具体的楽曲等

については、改めて報告したい。

参考文献

1）西海聡子、笹井邦彦、細田淳子（2017）「保育者養成における弾き歌いのためのコード伴奏法」『東京家政大学研究紀要』第57集

2）鈴木佑未子（2016）「幼稚園実習における弾き歌い及びピアノ演奏について　平成27年度アンケート調査分析結果報告」『JMSME音楽メディア研究第2巻』

3）林麻由美（2017）「保育者養成校におけるピアノ指導」『JMSME音楽メディア研究第３巻』

4）エミール・ジャック＝ダルクローズ著、板野平監修、山本昌男訳（2003）「リトミック論文集リズムと音楽と教育」全音楽譜出版社

5）下中弘（1981）「音楽大辞典全６巻」平凡社

6）浅香淳（1991）「新訂標準音楽辞典」音楽の友社

注

ⅰ）たいせつなともだち

作詞：逸見龍一郎　作曲：古川竜也

2009年にベネッセコーポレーションから出ている。ベネッセのCMで使用され、保育所や幼稚園などにCDを無料配布していることから広まりつつある。ベネッセのホームページにて、無料で楽譜をダウンロードすることが可能。

ⅱ）相対音感

音感には「絶対音感」と「相対音感」の２種類がある。「絶対音感」は聞こえた音の高さを楽器等の助けを借りずに識別できる能力。これに対して、現実に聞こえている音を基準にして、その音との比較を通して音程などを判断したり、必要な音を出したりする能力を「相対音感」という。

ⅲ）初見奏

初めて見る楽譜をその場で奏すること。

ⅳ）主要三和音

音階の各音上に作られた三和音のうち、Ⅰを主和音、Ⅴを属和音、Ⅳを下属和音とよび、これら３つをまとめて主要三和音と呼ぶ。

ⅴ）副三和音

主要三和音以外のⅡ、Ⅲ、Ⅵ、Ⅶの和音を副三和音という。

ⅵ）ドッペルドミナント

属調の属和音。例えばハ長調の場合、属調＝ト長調の属和音であるD7がこれにあたる。

ⅶ）スラー

音高の異なる、いくつかの音符の上や下につける弧線のことで、音を滑らかにつなげて演奏することを表す。

ⅷ）レガート

音と音を途切れさせず、滑らかに演奏する奏法のこと。

ⅸ）サスティンペダル（ダンパーペダル）

ペダルを踏んでいるあいだに押した鍵盤の音を、ペダルを離すまで保つ機能。ピアノ及びハープシコードの通常右側のペダル。

ⅹ）以下の論文を参照されたい。保育士・教員養成校で実施された、幼稚園実習後の弾き歌い及びピアノ実技に関する意識調査を報告した「幼稚園実習における弾き歌い及びピアノ演奏について　平成27年度アンケート調査分析結果報告」（鈴木佑未子、「JMSME音楽メディア研究第2巻」、p30-p38、2016）